

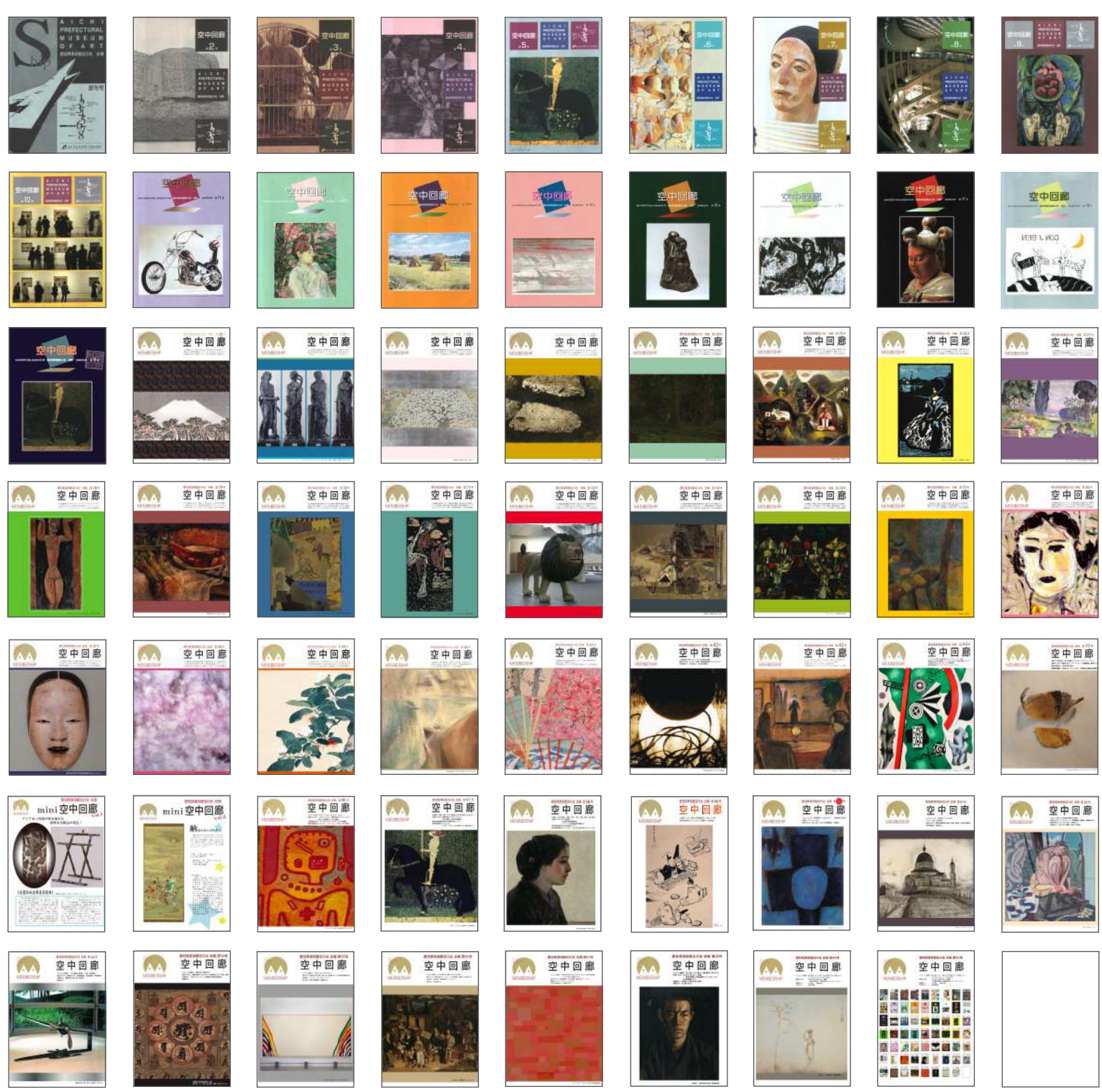
AICHI  
PREFECTURAL  
MUSEUM  
OF  
ART

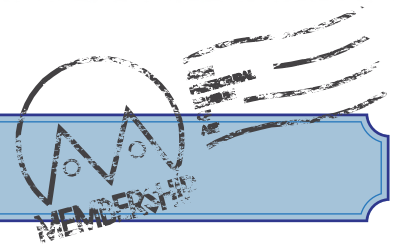
MEMBERSHIP

愛知県美術館友の会 会報 第60号

# 空中回廊

美術館から : 館長、学芸員挨拶  
会員のひろば : 会報「空中回廊」でたどる愛知県美術館友の会 30 年  
友の会から : 歴代友の会会長からのメッセージ  
友の会会長から、バスツアーレポート





## 友の会の皆様へ

気の利いたことを記すことができればよいのですが、不器用な私には難しいですので、率直にお伝えしたいと思います。本当に今までありがとうございました。私が当館に赴任する前の創立当初より、現在に至るまで、様々な形で支え続けて頂いたこと、感謝してもしきれない思いです。

開館当時と今を比べると、社会も美術館も随分変わって参りました。スマホ



ゴッホ展特別鑑賞会にて (2026/1)

やLEDなどはありませんでしたし、手書きや対面を通じたコミュニケーションから、世界の各地へ瞬時につながるそれへの変化は私達の間を大きく変え、随分と便利になりました。とはいえ、少なくとも美術館において、結局は人と人の直接的なつながりが基本であることは変わらないと思います。私達のそばにいていただいて、語り合えること、美術を通していろいろな体験を共有できることが、美術館のスタッフにとってはかけがえのない大切な価値であることは言うまでもないことです。そしてそれが皆様にとっても同様に大切な時間になっていけば、それはこの上ないことと感じておりました。



友の会総会での記念講演 (2025/5)

4月より地方独立行政法人となり、友の会活動を停止すること、組織や運営が変わることは許していただきたいのですが、美術館の本質的な部分が変わるわけではありません。少し猶予期間をいただきながら、友の会についても新しい方法を見出していきたいと考えています。

先日の特別鑑賞会に参加していただいた方にはこのように声掛けさせていただきました。「また戻ってきていただけますよね?」と。どのような形でお会いできるかはまだわかりませんが、再び皆様にお会いしてお話しできること、そばにいていただけることを希望して止みません。

本当にありがとうございました。そしてこれからもどうぞよろしく願いいたします。

愛知県美術館館長 平瀬 礼太

(ひらせ・れいた)



懇親会会場にて (2024/10)



愛知県美術館友の会が活動を終了するにあたり、美術館側の窓口学芸員として、その最後の数年間を担当させていただきました。会員の皆様をはじめ、設立にご尽力された方々や歴代の会員の方々、そして関係者の皆様に、あらためて深く御礼申し上げます。

2022年にICOM（国際博物館会議）が採択した「博物館の定義」には、展示や保存といった基本的な役割に加え、「コミュニティの参加とともに博物館は活動する」という力強い一文が記されています。特別鑑賞会や多岐にわたるサポート活動などを通じて、友の会はまさに、当館にとって「最も近く、最も深く活動に参画してくださるコミュニティ」そのものだったと、あらためて実感しています。

2026年4月より、当館は地方独立行政法人による運営へと移行します。形態は変わりますが、遠くない将来、新しい会員制度が設立されるはずで、そこで、また皆様と笑顔でお会いできる日を、今から心待ちにしています。

愛知県美術館 塩津 青夏  
(しおつ・せいか)



塩津学芸員によるトリエンナーレ特別鑑賞会 (2019/8)



中野悠学芸員による竹内栖鳳展特別鑑賞会 (2025/7)



石崎学芸員による岡本太郎展特別鑑賞会 (2023/1)

愛知県美術館友の会の会報「空中回廊」は1995年に創刊され2026年3月、友の会解散と同時に広報誌としての役割を終え廃刊します。30年間にわたり計60冊発行された「空中回廊」を改めてひもとく事で、友の会として主体的に運営を始めるまでのこと、災害や世の中の動きに合わせて変革を続けてきた友の会の活動を振り返ります。

創刊号  
1995年3月



## 友の会と周辺の出来事

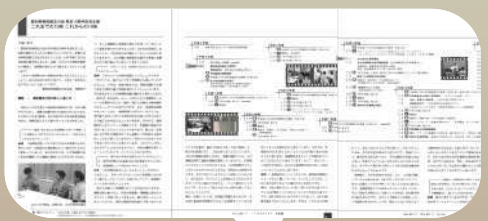
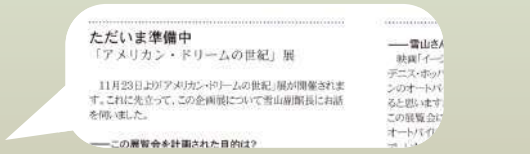
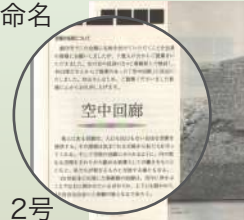
## 空中回廊

1992年	10月30日 愛知県美術館開館
1994年	10月 愛知県美術館友の会発足 初代会長：井関弘太郎氏
2000年	4月 友の会自主運営開始 7月 友の会事務局の専任職員配置
2001年	3月 美術作品寄贈積立開始 7月 会長に宮崎玲子氏 友の会マークがリニューアル

20号

中田賢氏による  
新友の会マーク

号数（発行年月）	内容
1 (1995.3)	創刊号、編集は後の愛知県美術館館長 村田真宏学芸員
2 (1995.11)	会報のタイトルを「空中回廊」と命名
3 (1996.9)	宮崎玲子氏が編集長に就任
4 (1997.3)	
5 (1997.10)	
6 (1998.2)	部分的に会員がレイアウト担当
7 (1999.1)	
8 (1999.3)	
9 (1999.12)	
10 (2000.2)	
11 (2000.11)	「ただいま準備中…」コーナーで企画展を広報開始
12 (2001.3)	
13 (2001.9)	水野愛子氏が編集長に就任
14 (2002.3)	
15 (2002.9)	
16 (2003.3)	
17 (2003.9)	
18 (2004.3)	
19 (2004.9)	会発足10周年企画「これまでの10年これからの10年」
20 (2005.2)	大幅リニューアル。企画展の紹介、「会員のひろば」
21 (2005.8)	「コレクションから（「収蔵庫から」の前身）」開始
22 (2006.3)	
23 (2006.9)	



2007年

5月 会長に太田幸一氏

2009年

5月 会長に油田弘佑氏

2010年

4月 初のバスツアー開催

8月 あいちトリエンナーレ2010開催

2011年

3月17日 東日本大震災発生

2013年

4月 「プーキン美術館展」開催

2014年

6月 友の会20周年記念懇親会

2015年

7月 アートカフェvol.1開催

2017年

11月 愛知県美術館改修工事の為休館

2019年

4月 愛知県美術館新装オープン

2020年

2月 新型コロナを「COVID19」と命名

2020年

2月 動画配信開始

「おうちで美術鑑賞会」(設楽知昭氏)

50号

「GENKYO 横尾忠則」展解説(南雄介館長)

51号



24(2007.3)

25(2007.9)

26(2008.3)

27(2008.9)

「所蔵作品管理サポート活動の足跡」として所蔵作品管理グループの活動を紹介



28(2009.3)

29(2009.10)

30(2010.3)

31(2010.10)

九州国立博物館に関わる諸団体の訪問を紹介

32(2011.4)

33(2011.9)

「石巻文化センターの文化財レスキュー」掲載

34(2012.3)

村田眞宏館長による「棟方志功展 顛末記」掲載

35(2012.9)

36(2013.4)

表紙作品の拡大表示を開始



36号

37(2013.12)

38(2014.3)

39(2014.9)

APMoA Project, ARCH紹介



42号

40(2015.3)

41(2015.9)

42(2016.3)

石田尚志『フーガの技法』(2001年)映像作品が表紙に

43(2016.10)

44(2017.3)

45(2017.9)

「mini空中回廊」発行 vol.1(18年1月) vol.2(18年6月)

46(2019.2)

47(2019.10)

mini Vol.2



48(2020.3)

49(2020.9)

友の会活動自粛のため4ページ構成

50(2021.3)

51(2021.9)

52(2022.3)

53(2022.9)

54(2023.3)

「美術館さんぽ」を紹介



55(2023.9)

56(2024.3)

57(2024.11)

58(2025.3)

友の会創立30周年記念懇親会の紹介



59(2025.11)

60(2026.3)



会報の廃刊にあたって、歴代友の会会長にメッセージをお願いしました。友の会創成期から携わり会報の初代編集長も務められた宮崎玲子氏、会員の多様なニーズと世の変化に応える運営をされた太田幸一氏と小林克敏氏です。友の会運営で印象に残っていることや思いを綴っていただきました。



宮崎 玲子

「空中回廊」19号には、市川館長、木本企画普及課長と友の会会長だった私との鼎談が載っています。友の会発足十年と言うことで、それぞれ友の会の新しい姿について語っています。その頃はまだ友の会にできることは何なのか、試行錯誤をしている頃でした。とにかく大勢の美術愛好家に、友の会の会員になっていただくことが第一ではないか。そして皆で考えました。広々としたロビーでパーティをしたらどうだ

ろうか。その頃役員をしていた人たちがいろいろ支度をし、何とか広いロビーで立食パーティを開くことができました。館長をはじめ、学芸員の皆さんと打ちとけたお話をすることができました。このパーティは何回続いたのでしょうか。

そしてもっと素晴らしいことは、美術以外の芸術家に、その時の展覧会に合わせた演技をしていただくことでした。独言、長唄、韓国舞踊、ジャズ、その他、今から思えば美術以外の芸術家の方々がよくおいで下さったものだとしみじみ思います。今ではあの美術館のロビーは使えなくなりましたが、あの頃の友の会の熱気は忘れ難いものです。

その頃の学芸員で現在は碧南市藤井達吉現代美術館長木本氏、豊田市博物館長村田



ナイトカフェの様子



浅野元館長、市川元館長、宮崎元会長、木本元副館長

氏、豊田市美術館長高橋氏、そのお三方には本当にお世話になりました。今友の会があるのはこのお三方のお陰と言っても過言ではないと思います。

ロビーが使えなくなってから、友の会の活動もそれまでとは違うものを考えなければならなくなりました。当時役員におありになった皆さんは随分ご苦勞をなさったと思います。美術館も友の会も、その時代に応じた活動が求められ、それぞれの努力で素晴らしい活動が生まれるのだと思います。

思い起こせば、時はあっという間に過ぎて行き、私も九十歳代の老人になりました。けれどあの熱気のあった友の会の活動は、私の生涯の大切な宝物になっているのです。

美術の分野は全くの門外漢であるにもかかわらず、友の会に入会したのはかなり昔のことで、入会した経緯の記憶が定かではありません。会長ポストも不資格そのものだったにもかかわらず、周囲の事情からやむなく引き受けさせられたものでした。会の運営も不慣れなため会員や

美術館の皆さんにご迷惑をかけるばかりだったとの記憶が強く残っています。しかし、80歳を超えた現在まで喘ぎ喘ぎ企画展に通えたのも、この時の経験によるものと感謝しています。

愛知県美術館と友の会に代わる鑑賞組織の今後の隆盛を心よりお祈りいたします。

太田 幸一

### 愛知県美術館友の会の活動を振り返って

私と愛知県美術館との関わりは、愛知県文化会館美術館時代に開催されたクレー展やムンク展、田中一村展、ウォーホル展などを通じて、美術への関心を深める素地を得た頃に遡ります。

その後、美術科教師として鑑賞学習交流会に参加いたしました。友の会に入



ピンホールカメラを用いたワークショップ

会してからは、ピンホールカメラを用いたワークショップの開催や、野外音楽会の準備などにも携わりました。また会報の編集に加わり、理事を経て会長を仰せつかることになりました。美術館の館長、学芸員の皆様、理事の皆様とともに、特別鑑賞会、講演会、バスツアーなどを開催することができました。愛知県美術館の改修工事で施設が利用できない際には、他館へ出かけての鑑賞会も実施しました。

特にコロナ禍においては、設楽知昭氏の県立芸大退官記念展の作品解説を録画し、会員限定で配信する取り組みを行いました

た。美術館においても、特別鑑賞会が実施できないことから、南館長が会場で解説され、拝戸副館長が録画・編集を担当して配信されました。その後、特別鑑賞会でのお話は毎回録画し、会員限定で配信する形式が定着しました。「特別鑑賞会に参加したけれど、またじっくり解説が聞けてよかった」というお声もいただき、この取り組みを進めてこられたことには大きな意義を感じております。

30年を超える長きにわたって友の会を支えてくださった美術館の皆様はじめ、会員の皆様の温かいお力添えがあつてこそ、ここまで活動を継続することができました。改めて感謝申し上げます。文化会館美術館から愛知県美術館へと移行した際に、それまでと異なる新たな友の会が発足しました。今回も、美術館が新しいシステムへと移行していくことで、友の会も新しいものになり、より多くの人たちが集い、美術を楽しむことのできるようになることを期待しております。

小林 克敏



AICHI  
PREFECTURAL  
MUSEUM  
OF  
ART

友の会  
会長から

MEMBERSHIP

10年ほど前、美術館の書庫から愛知県文化会館美術館時代の友の会の書類綴り見つかり、私の手元にお預かりしています。当時の人数規模は今とさほど変わらないのですが、写生会、講演会、他館見学会などの様子から、今より美術関係者の割合が高かった様に感じられます。

その後、現友の会になってから、諸先輩方のご努力や時代の変化などからか、会員層が顕著に拡大してきて現在に至っている様に感じています。

私が美術館を好きな理由の一つに、誰も威張っていないことがあります。ジャンル、地域、時代が広過ぎて、作者も多過ぎて、全部に詳しい人など誰もいません。鑑賞の視点も、技法だったり、自分の感覚的な好き嫌いだったり、時代背景だったり、もう無限にあります。

他人と比べる必要も無く、一人一人が自由に思いを巡らせばよい、究極の思索の場だと思っています。友の会の先輩方に接していると、流石にいろいろなことをよくご存じで、同じものを観ていても思い浮かぶことが随分多いだろうと思いますし、自分も少しずつそういう楽しみが増えてきていると感じます。

最近、身の回りのいろいろな人から、生成AIが何でもあっという間に作っちゃうんだ、という話を耳にします（ちなみにこの原稿はAIは使っていません）。こういう時代ゆえ、AIが気付けないことを発想する場としても、美術館という社会インフラは、もっともっと多様な人々に使ってもらえるといいのではないかと思います。特に若い世代や現役世代の方々にはと、自戒もあり思っています。

この会報誌が皆さまのお手元に届いてから、10日間ほどで、最終の会計処理、事務所の大掃除、各所へのご挨拶をして、現友の会の活動がほぼ終わります。1年とか少し間が空いた後、美術館から新たな会員制度のご案内が届くだろうと思います。皆さまどうぞ楽しみになさっててください。

(愛知県美術館友の会 会長 田中 寛)

## 編 集 後 記

友の会活動と会報『空中回廊』の30年の歩みを一覽にしてみました。作成にあたって丹念に会報のページをめくっていくと、まるでヒトが生まれ四つん這いで歩き二本足で歩き、自分の意思をもって進み始める様を追っているような気分になります。また美術が好き、愛知県美術館が好き、という共通点で集まり活動を続けることができたのも美術館のご協力あってのこと。改めてお礼申し上げます。

- 編集 松下智子  
喜田泉/小林克敏/田中寛/逸見仁
- 協力 愛知県美術館
- 発行 2026年3月

Design & Layout : Hitoshi Hemmi, Katsutoshi Kobayashi

## 定例活動

2025年11月～2026年3月

所蔵品管理 (読み下し)	モニター	発送	受付[県外]	広報	ホームページ	理事会
0回 (0回)	1回	3回	3回	0回	随時更新	2回

## 友の会活動紹介

2025年11月～2026年3月

11月・友の会講座「リビング・モダニティ 住まいの実験」展  
長屋光江 愛知県美術館副館長兼企画業務課長→動画配信

・懇親日帰りバスツアー 兵庫県立美術館



11月18日火曜日、恒例のバスツアーで「兵庫県立美術館」に行きました。まず、ヤノベケンジの《Sun Sister》の前で記念撮影をし、ミュージアムレストランでランチをしました。

兵庫県立美術館は1970年に「兵庫県立近代美術館」として神戸市灘区に開設されました。しかし1995年の阪神・淡路大震災で被災。2002年に安藤忠雄の設計で現在の地に再建築されました。安藤建築らしいRC造で複雑な動線を持ち、まるで迷路のようです。企画展は「リビング・モダニティ 住まいの実験 1920s-1970s」。ル・コルビュジェ、ミース・ファン・デル・ローエ等々といった著名な建築家が設計した個人の邸宅の紹介です。学芸員さんが「個人宅とはいえ、まるで公共の建物のようです」と言っていたように大邸宅ばかりですが、建築家が粋を凝らした建物は素晴らしかった。日本人宅は4例紹介されています。特に藤井厚二の「聴竹居」は、京都の気候にあわせた工夫が随所に取り入れられていて、快適な家だったと思われます。とても広い美術館で、全部を回り切れなかったのが残念でした。

1月・特別鑑賞会「ゴッホ展」石崎尚 主任学芸員→動画配信

2月・解散総会

## 愛知県美術館友の会

〒461-8525 名古屋市中区東桜一丁目13-2  
愛知県美術館内（愛知芸術文化センター11階）

✉ [info@apmoa-tomo.com](mailto:info@apmoa-tomo.com)

ホームページへのアクセスはこちらから

愛知県美術館友の会

検索

[apmoa-tomo.com](http://apmoa-tomo.com)

tel. 052-971-5511 (代)

fax. 052-971-5617

(火・木 11:00~15:00)



@apmoafriends

